

◆連載-Vol.36

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948年神奈川県生まれ。
1971年千葉大学建築学科卒業、
『住宅特集』『新建築』編集長を
経て1994年からフリー編集
者。1999年～2014年千葉大
学客員教授。

新たな建築表現を求めて その3

安藤忠雄 モダニズムと和風

伊東豊雄が「中野本町の家」を発表した1976年に、安藤忠雄も「住吉の長屋」を発表。いずれもインパクトの強い建物であった。

「住吉の長屋」は毀誉褒貶相半ばというが、どちらかというとも年配の建築家には受けが悪かった。ある意味では建築家の役割が大きく変わったことの表れでもあった。

坂倉準三建築研究所の所員だった西澤文隆が設計した「正面のない家」(1960)の図面を宮脇檀と一緒に読み込んだとき、台所の引き出しやシンク下の扉の詳細図や展開図を見てふたりで驚いた。引出しはいくつかに仕切られており、ひとつひとつにスプーン、フォーク、ナイフ、箸などと書き込まれ、扉には出刃包丁、刺身包丁、柳刃などと位置まで丁寧に書き込まれていたのだ。

建築家たるもの、住宅を設計するのであれば、ここまで親切に設計しなければ職能を全うできていない、というのが当時の建築家たちの共通した考え方であった。そこにはモダンリビングが日本にはまだ定着していなかったという時代背景がある。70年代前半に、これぞモダンリビングという住宅に取材に行くと、玄関にはシャケを啜えた熊の彫り物が置かれ、居間では口を開けた虎の敷皮が待っていたなんてことはザラだった。雑誌が取材に来ると言うことで、家宝を並べて待っていてくれたのだ。そんな光景も徐々に減ってきて、ようや

くモダンリビングが定着することになるのだが、これがおよそ70代の後半である。そんな時代もあったのだ。

建築家には、新しい生活を啓蒙しなければならないという使命感があった。だから安藤の「住吉の長屋」は、雨の夜に寝室からトイレに行こうと思ったら傘を差していかなければならない、そんな機能的ではない住宅はあり得ない、ということになる。もちろん、そんなことは百も承知でこの住宅は計画されている。施主には自然を感じたいという要望があったと聞いた。しかし、周辺は密集した棟割長屋が立ち並ぶ環境で、しかもその棟割長屋の一部を切り取って建てるのだから、周囲は閉じられていて内側に向かうしかない。風も雨も雪も、また流れる雲も星空や月夜も自然そのもの。それを感じられればよいのではないかという、いわば究極の居直りかもしれない。しかし、トイレが御不浄と呼ばれ、多くの民家、とくに農家では別棟であったのは戦後まで続いていたのである。

「住吉の長屋」が建築として成立し、40年以上も住み続けられているのは、設計者にも施主にも、よほどの覚悟がなければできないことであろう。日本建築学会賞を受賞したのは3年後の1979年のことである。

その後続く安藤の作品は、明快な空間構成に向かっていく。明快な空間構成とは、いわばモダニズムの原点かもしれない。異論があると思うが、安藤の空間性は、どこか和風建築を思わせるものがある。コンクリート打放しではあるものの、コンクリートとしての重量感は表面の平滑性によって払拭され、むしろスクリーンとして見えないか。和風空間を

仕切るのは壁ではなく、障子や襖、あるいは簾などのスクリーンであることを考えると、このように感じられるのである。

コンクリートしかやらないと言っていた安藤が初めて木造に取組んだのがセビリア万博だったと思う。同じ断面サイズの集成材を用い、ボルトで接続していた。それまでの平面図を見るとシンメトリーなものではなかったが、ここで初めてシンメトリー性を正面から押し出した構成が出てきた。後年であったが、このことを直接訊いたことがあったが、本人からはこれといった回答をもらうことはできなかった。

もちろん、それまでもコンクリートの建物でシンメトリーなものはなかった。ところがあるとき、安藤がエスキスしているところを見た。正方形グリッドの連続であったが、見ているうちに気づいたのは、どうやら平面だけではなさそうだ。平面と断面を同時に考えていたのだ。空間を構成する場合、立体的にとらえることは重要で、平面、断面と順を追うのではなく、同時に進めていくエスキス方法を初めて見たと思う。この辺りが安藤建築の神髄かもしれない。

なお、話題になった新国立競技場デザインコンペの審査員長として、結果発表の時に安藤が言い放った言葉には納得した。「できるかどうかわからないが、日本のゼネコンの技術をすればできるだろう」という意味のことである。そして、ザハ・ハデイドの案が選ばれた途端に大ブーイングが起こった。メディアがこぞって批判したし、そのお先棒を担いだ評論家もいた。

かつて、この騒動について説明せよとの依頼が私にあり、

某所で話さなければならなくなった。改めて応募要項を読み直してみた。はっきり言えばひどい一言に尽きる。2カ月程度の応募期間に対して要求内容が過大極まりない。「デザインコンペ」と銘打っていたが、その意味を吟味したのだろうか。実施コンペとほとんど変わりのない内容である。

設計者選定方式について言えば、平成3年に建設大臣(当時)の諮問機関である建築審議会(会長:丹下健三)が行った答申以来かなり整理されてきた。いや、むしろより多様化してきたかえって混乱してきた感があるが、「デザインコンペ」などは企業が主催するアイデアコンペくらいのもので、実際に建設する建物においてのデザインコンペという例はこれまでにはなく、すでにその時点で曖昧なコンペだった。

ザハの案が否定されて、いきなり誰が設計したかも不明なダンゴムシみたいな案が提示された。この時点で応募要項違反である。要項に「最優秀者はデザイン監修を行う」とあるにもかかわらず、最優秀者であるザハの許可なく、矮小化した案をいきなり提出したなど、コンペに関して無知な人間にしかできないことである。

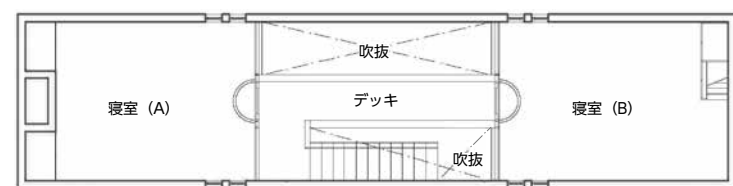
かつてシドニー・オペラハウスのコンペでヨン・ウツォンが選ばれたとき、どんな構造で建設可能か、誰も見当がつかなかった。それを解決したのがイギリスのオブ・アラップだった。そして完成するまでに14年、工費も14倍に膨れ上がった。それでもやり遂げたのは、国際コンペを開催した責任を全うするためであろう。このことを建築評論家の五十嵐太郎と話したことがあった。若手評論家としてさまざまなメディアから意見を聞かれ、そのたびにシドニー・オペラハウスの話をしたけれど、どのメディアからも無視されたと聞いた。それこそザハ案を叩くための談合をメディアがやったのではないかと疑いたくなる。

要項の「最優秀者はデザイン監修を行う」ことに従い、運営側は規模の大きさ、建築基準法やその他の法律に抵触する部分の修正を、まずザハに指示するのが筋ではなかったか。白紙撤回などで国際的な信頼度が失われるといった声も聞こえたが、ダンゴムシが登場した時点で、すでに国際的信頼度は無に帰している。

安藤がゼネコンの技術力に期待をかけたことこそ、審査委員長として正しい判断だったと、今でも思う次第である。念のために書き加えておくが、榎文彦の寄稿が元で巻き起こった論争とはまったく次元の異なったことである。(続く)



「住吉の長屋」
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



「住吉の長屋」 2階平面図



「住吉の長屋」 1階平面図 縮尺1/150



「セビリア万博 日本館」
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)